副助詞「ノミ」の変容と副助詞研究の課題

山　田　昌　裕

Changes of an Adverbial-particle “NOMI” and Problems of Adverbial-particle Study

Masahiro Yamada

Abstract

In this paper I analyzed historical changes in a Japanese adverbial-particle “NOMI” from a perspective of the connection with the case particle. I considered a 1st change in a particle “NOMI” to be the grammaticalization. I considered a 2 nd change in a particle “NOMI” to be the search of convenience. I also discussed several problems concerning adverbial-particle study.

Key Words: Changes of an adverbial-particle “NOMI”, Grammaticalization, Problems of adverbial-particle study

１．はじめに

本稿では、副助詞「ノミ」と格助詞「ヲ」「ニ」との承接に注目することによって，「ノミ」の変容について考察する(1)。またそれを踏まえて今後の副助詞研究の課題についても述べる。論を進めるにあたって，「ノミヲ」「ノミニ」のように「副助詞＋格助詞」という承接形式を「第１形式」，「ヲノミ」「ニノミ」のように「格助詞＋副助詞」という承接形式を「第２形式」とする。

以下，２節では，「ノミ」の承接形式の推移を略述し，３節では，先行研究とその問題点を指摘し，４節では，「ノミ」の第１形式から第２形式への変化を「ノミ」の文法化として位置づける。５節では，第１形式の復活及び増加を，「ノミ」を使用する際の言語運用上の利便性の表れとして位置づける。６節では，今後の副助詞研究の

課題について述べる。

なお本稿で扱った資料に関しては巻末の【資料一覧】を参照されたい。

2．承接形式の推移略述

2.1　奈良期平安期

小柳（1999，2003）によれば，奈良期に見られる「ノミ」と格助詞との承接形式は第１形式であり，第２形式は『万葉集』に１例のみ見られるという。また平安期になると「ノミ」と格助詞の承接形式は第２形式になると指摘する。

しかし，平安期における第１形式は皆無ではない。管見によれば以下の例が存在する。

【ノミヲ】

①　無愛子想ト云ハ大唐ニ易賀ト云シ大臣也，獣鱗ノミヲ食ト為ス
（三教指帰注101頁）

②　但天水の碧色のみを見る。豈山谷の白霧を視むや　（性霊集267頁）

【ノミニ】

③　諸の沙門婆羅門の父母妻子及び眷属有らむ。彼の意の為に其の言を受て，広く不善非法の行を造ること莫れ。設ひ此等為に諸の過を起せども，未来の大苦は唯身のみに受く。　（往生要集48頁）

④　百姓（おほみたから）の田に施す。田に施す水既に窮まれば，諸天感應して，龍神雨を降らす。唯卿の田のみに澍（そそ）きて餘の地（つち）に落らず　（日本霊異記131頁）

⑤　天神感ヲ垂レ，龍神雨ヲ降ス。但シ，高市麿ノ田ノミニ雨降テ，余ノ人ノ田ニ不降ズ。此レ偏ニ，実ノ心ヲ至セレバ，天此レヲ感テ，守加フル故也
（今昔物語４・210頁）

いずれも訓読系の資料で，「ただ～のみ」という表現形式に偏っているという点が特徴的であるが，平安期において「ノミ」と格助詞との承接形式が第２形式だけになったというわけではないことがうかがえる(2)。とはいうものの，「ノミ」と格助詞との承接形式としては第２形式が優勢であることは間違いないところであり，特に和文系資料においては第２形式となっていると言える。

2.2　鎌倉期室町期

鎌倉期室町期においても，「ノミ」と格助詞「ヲ」「ニ」との承接形式は前代に引き

続いて第２形式が優勢であるが（191例中173例，90.6%），第１形式も次第に増加してくる（191例中18例，9.4%）。そして訓読系資料だけではなく，和文系資料にも第１形式が見られるようになる。

【ノミヲ】

⑥　坐禪辨道すること三十餘年なり。人事たへて見聞せず，暦おほよそおぼえず，四山青又黄のみをみる。おもひやるにはあはれむべき風霜なり　（正法眼蔵195頁）

⑦　或大福長者の云，「人は萬をさしおきて，ひたふるに徳をつくべきなり。まづしくては生けるかひなし。とめるのみを人とす。徳をつかんと思はば，すべからく，まづその心づかひを修行すべし」　（徒然草264頁）

⑧　寄せては帰る片男波，寄せては帰る片男波，芦べの鶴こそは立ち騒げ，四方の嵐も音添へて，夜寒なにと過ごさん。更け行く月こそさやかなれ，汲むは影なれや，焼く塩煙心せよ，さのみなど海人びとの，憂秋のみを過さん　（謡曲集上・松風60頁）

【ノミニ】

⑨　又，佛性は生のときのみにありて，死のときはなかるべしとおもふ　（正法眼蔵143頁）

⑩　「笙は，調べおほせて持ちたれば，たゞ吹ばかりなり。笛は，吹ながら，息のうちにて，かつ調べもてゆく物なれば，穴ごとに，口傳の上に性骨を加へて心を入るゝこと，五の穴のみに限らず。ひとへにのくとばかりも定むべからず」　（徒然草267頁）

⑪　うき世にすむも，すつるも，やすからぬ命，いつまでながらへて，あらましのみにくらさまし　（曽我物語99頁）

2.3　江戸期

前代に比べてかなり第１形式が増加する。江戸期における「ノミ」と格助詞「ヲ」「ニ」との承接形式は，第２形式が64.3%（185例中119例），第１形式が35.7%（185例中66例）となる。ただし，23例見られる第１形式「ノミニ」のうち10例が「～のみにかぎらず」形式であり，慣用的な表現への偏りも見て取れる。

【ノミヲ】

⑫　草履取の三八がまかり出て，「左様に酒な御しいなされそ。今朝もお里で，さけのみをまいりて，いまにお顔が赤ひ」と申た

（江戸笑話集・きのふはけふの物語72頁）

⑬　「かならず我事思し切らせられて，たゞ御首尾よくお歸りのみを願ふ」と身請の事とてはなを〳〵書にも書いておこさぬは　（浮世草子集・傾城禁短氣178頁）

⑭　跡に殘るかなしさは，闇の夜の灯に放れ，沖の舟のかぢをもがれたるやうにて，川の音もうらめしく，山の雲も忌ミ〳〵しく，ともに黄泉に入らんことのみをまちて，秋春と過しけるに　（一茶集・文集481頁）

【ノミニ】

⑮　夫婦よろこび，「唯今も御事のみに人々手分して國々を尋侍る。過つる六日の夜，御親父様御はて遊しける」とかたる内に　（好色一代男126頁）

⑯　「この者謠を忘れて，扶持方を取る事成らで歸りし。總てこれのみに限らず，侍衆の中にも武道不嗜なる御方は皆この類なるべし

（仮名草子集・浮世物語299頁）

⑰　やつがれ浪花に七とせあまりも居住せしが，花洛へは唯用弁の爲のみに登れば，一覽の目をよろこばせしまでにて，悉しからず　（東海道中膝栗毛373頁）

この期になると，同一作者あるいは同一資料内において第１形式と第２形式の使用が見られる。例えば，⑭で一茶は第１形式を用いているが，『父の終焉日記』では「夜明をのみ待たりし」（426頁）と第２形式を用いている。芭蕉も『おくのほそ道』で「其跡たしかならぬ事のみを」（81頁）と第１形式を使用する一方で，『俳文』では「正に幻住老人の名をのみ殘せり」（184頁）と第２形式を使っている。白石もまた『折たく柴の記』で「見参の事のみを申さずとも」（242頁），「といふ事をのみ申して」（350頁）と両形式を用い，その他『椿説弓張月』『雨月物語』『膽大小心録』『鹿の巻筆（江戸笑話集）』『歌学提要』『歌意考』などの各資料においても両形式の使用が見られる。

このことは，「ノミ」と格助詞との承接において，第１形式と第２形式が何らかの相補的な振る舞いを見せるわけではなく，単に承接形式が混同するようになってきたということを示唆する。

2.4　明治期(3)

第２形式と第１形式の割合は逆転する。この期における「ノミ」と格助詞「ヲ」「ニ」との承接形式は，第１形式が56.7％（1079例中612例），第２形式が43.3％（1079例中467例）である。

「～のみにかぎらず」形式はこの期にももちろん存在するが，「ノミニ」において

はその他多様な表現が見られるようになる。

また前期に増して，以下に示すような，文法的同環境における第１形式と第２形式の混同例が多く見られるようになる。「ノミ」と格助詞との承接は，いずれが前後でも構わないというファジーな振る舞いを見せることとなる。

⑱ a 夫れ存養自修とは唯禮の美行の善の如き外面の修飾のみを云ふにあらず
（丸山通一「儒教管見」1895年）

⑱ b 此に外債の増加と曰ふは政府地方自治體若くは株式會社の外國に於ける公債若くは社債發行の増加をのみ云ふに非ずして
（本多精一「外債増加と産業問題」1909年）

⑲ a 決して下等の快樂を排斥し高等の快樂のみを求めんとするに非ず
（元良勇次郎「人生観に就て」1895年）

⑲ b 専門の史家は史實の爲めに史實をのみ求めんとする考證穿鑿の一方に走り
（山路愛山「日本現代の史学及び史家」1909年）

⑳ a 然らば即ち其事を以て大藏大臣のみを責るは酷なり
（坪谷水哉「経済時評」1901年）

⑳ b 公徳問題が厭にやかましくなつたが，一般の人々をのみ責めるのは甚だ宜しくないと思ふ　（ひねくれ坊「公徳問題について」1901年）

また，この期では「をのみを」「にのみに」「をのみに」など特殊な例も見られる。これらの例は，第１形式と第２形式が同時に表示されていると考えられる例であり，それだけいずれの形式も当時としては一般的な表現形式として認知され，しかもそれが混同していたことを示唆する。

㉑　凡そ西洋を稱するところのものは概ね皆其機械的智識的の一方をのみを觀察して，而して心靈界に及ぶもの尠きが如し　（松村介石「明治の心霊界」1895年）

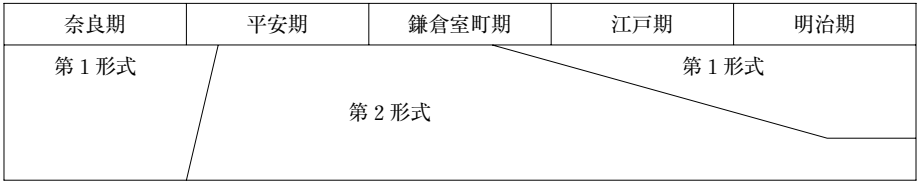
㉒　即ち今の文部省は，教育上の重大且つ必要なる新事業を起さんとはせずして，唯細事末節にのみに齷齪す　（大町桂月「教育時評」1901年）

㉓　其潮勢を九重の上より注瀉したる時代には，王公貴人いかで亦其採集したる配賦をのみに安んずべき　（久米邦武「京都は国美の庫なるを論ず」1895年）

2.5　承接形式のまとめ

「ノミ」と格助詞「ヲ」「ニ」の承接形式の通時的推移を図にまとめると【図１】

【図１】



のようになる。

「ノミ」と格助詞との承接形式の変化は歴史上２回存在する。奈良期から平安期にかけての第１形式から第２形式への移行，そして鎌倉期以降の第１形式の復活である。この２回の変化は「ノミ」に関して，それぞれどのような言語現象を示すものとして位置づけられるであろうか。

３．先行研究とその問題点

3.1　先行研究

「ノミ」に関連して，小柳（1999）では一連の研究（小柳（1997，1998））をまとめて以下のように述べる。

> バカリは接尾語のように上接語とだけ関係し，ノミは句（右の第２例で言えば「音を泣きて」）全体に関係することが明らかになった。これを承けて前稿では，句全体に関係してその句の表す「事態の在り方」を表す助詞のことを，真に副助詞らしい副助詞と考え，中古のノミがこの意味での副助詞であることを確認した。このように副助詞には少なくとも２種の別がある。そこで本稿では，上接語とだけ関係するものを「第１種副助詞」，句全体に関係するものを「第２種副助詞」と呼ぶことにする。

「ノミ」は句全体に関係する副助詞で，これを「第２種副助詞」としている。

また小柳（2003）では，中古語では上記の副助詞の機能により，上接語とだけ関係する第１種副助詞は格助詞に前接し（本稿で言う第１形式），句全体に関係する第２種副助詞は格助詞に後接する（本稿で言う第２形式）と述べる。

> たとえば，次の（１）の「ばかり」は「直衣」という語に後接して，この語だけに関係し，一方，（２）の「のみ」は「光を」という成分に後接して，「いよいよ光を添へたまふ」という節全体に関係すると考えられる。

（1）直衣（なほし）ばかりを取りて，（直衣だけを取って）
（源氏物語・紅葉賀・1，p. 341）

（2）いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌（かたち）など，（ますます光をお加えになる一方のお姿など）　（源氏物語・行幸・3，p. 297）

格助詞と相互承接をする時，第1種の「ばかり」は（1）のように，格助詞に前接し，第2種の「のみ」は（2）のように，格助詞に後接する。これは，第1種は語（（1）は名詞）に，第2種は成分（（2）は格成分）に関係するためで，第1種は接尾語のように前接語に密着し，第2種は挿入的に節に入り込むと言うことができる。（p. 159～160）

以上のような理論に基づいて，小柳（1999）では，「ノミ」の変容について以下のようにまとめている。

ノミは元来は第1種であったが第2種へと変容し，上代はその過渡期に当たると考えられる。そして，この第2種への変容の結果生じた最も顕著な形式上の変化が，本稿冒頭に示した，格の内側に収まっていたノミが格の外側に出るという変化なのである。

小柳（1999）では，格助詞との承接上の変化である，「ノミ」の第1形式から第2形式への移行は，第1種副助詞から第2種副助詞へと「ノミ」が変容したことを示す言語現象として捉えているわけである。

3.2　先行研究の問題点

先行研究では，「ノミ」の第1形式から第2形式への変化を第1種副助詞から第2種副助詞への変容の表れと捉えていたが[4]，先行研究の理論には以下に述べるように問題点がある。

3.2.1　問題点その1――第2形式のとりたて――

「ノミ」は平安期に入って第2種副助詞として完成すると見ているが，その具体的根拠が示されておらず，承接形式が第2形式だけになったという形式上の理由から認定しているきらいがある。そもそも第2形式と第2種副助詞をつないでいるのは，「ヲノミ」や「ニノミ」などの「ノミ」が句全体に関係してとりたて機能（以下，「句とりたて」とする）を発揮していると考えるところにあるが，平安期の「ノミ」には

上接語のとりたて（以下,「語とりたて」とする）と解釈される例も散見する。以下のような「ノミ」（例㉔～㉘）は小柳理論にならえば第１種副助詞ということになる。

㉔　皆事はじまりて，上達部，君達，さゝげてめぐり給ふ。白銀黄金の蓮の開けたるをなん，人々多くしたりける。中納言のみなん，白銀を筆のかたに作りて，やい軸に色どりなして，うすものに透し給へりける。（落窪物語201頁）

㉕　例の，中将の君，こなたにて御遊びなどしたまふに，抱き出でたてまつらせたまひて,「皇子たちあまたあれど，そこをのみなむ，かかるほどより明け暮れ見し」
（源氏物語１・紅葉401頁）

㉖「何ヲ老タルトハ云ゾ」ト。荅テ云ク,「此ノ人，昔ハ若ク盛ナリキ，今ハ齢積テ形衰ヘタルヲ老タル人ト云フ也」ト。太子，又問給ハク,「只此ノ人ノミ老タルカ，万ノ人，皆此ク有ル事カ」ト。荅テ云ク,「万ノ人，皆此ク有ル也」ト
（今昔物語１・57頁）

㉗　この大徳の顔容貌姿をみるに，悲しきこと物に似ず。その人にもあらず，影のごとくになりて，たゞ蓑をのみなむきたりける。少將にてありし時のさまのいと清げなりしをおもひいでて，涙もとゞまらざりけり　（大和物語339頁）

㉘　婿に欲しうする人々の邊にも寄らず，君の御眞似をのみして，夜・夜中の御供に後れず，又，わたくしの里わたりをのみ尋ぬるわざをのみしけり。
（狭衣物語92頁）

㉔は「人々」「中納言」，㉕は「皇子たち」「そこ」，㉖は「此ノ人」「万ノ人」がそれぞれ対比されており,「ノミ」は語とりたてと考えられる。㉗は，普通ならばいろいろなものを身につけているであろうに,「蓑」だけ身につけているという文脈であり，やはり語とりたてと考えられる。「蓑を着ているだけであった」という句とりたては不自然である。㉘はすでに「尋ぬるわざをのみしけり（訪ねることばかりしていた）」と「ノミ」による句とりたてがされているので,「里わたりをのみ尋ぬる」の「ノミ」は語とりたてとしか考えられない。

このように平安期の「ノミ」は格助詞との承接形式が第２形式となっているにもかかわらず，文脈上語とりたてとして解釈される例が少なからず認められる。

さらに第２形式の「ノミ」には語とりたてなのか句とりたてなのか，いずれとも判断しがたい例が意外に多い。

㉙　汗もしとゞになりて，われかの氣色なり。「物おぢをなん，わりなくせさせ給ふ御本性にて，いかに思さるゝにか」と，右近も聞ゆ。「いと，かよわくて，晝も，空をのみ見つるものを。いとほし」と思して　（源氏物語１・夕顔147頁）

㉚　萬心のどかに，宮に啼み咲み，たゞ御命を知らせ給はぬ由を夜る晝語らひ聞えさせ給へど，宮例の御有様におはしまさず，物心細げに哀なる事共をのみぞ申させ給。　（栄花物語上・205頁）

㉛　うへ，渡りつゝ見給ふに，「ありつかず，かたはらいたき事多く，物言ひさしすぎて，心ばへふさはしからず」とは見給へど，もとより物細かならぬ御心にて，さすがにおほどかにて，人の有様など，よくも見知り給はぬまゝに，うらやましく，年此おぼしける事の叶ひたるをのみ喜びて，少々の事に，はたよらずぞ思したる。　（狭衣物語83頁）

㉙の「ノミ」は，昼間も夕顔が見るものと言えば「空ばかり」見ていたという語とりたてとも，夕顔は他にすることもなく「空を見るばかりであった」という句とりたてとも解釈可能である。㉚の「ノミ」も，宮はいつもとは違って，「哀なる事共」ばかりおっしゃるという語とりたて，あるいは宮はいつもとは違って，「哀なる事共をおっしゃるばかりである」という句とりたて，いずれの解釈も可能である。㉛も同様に，語とりたて「長年お思いになってきた事が叶った事」をばかり喜んでとも，句とりたて「長年お思いになってきた事が叶ったことを喜ぶばかりで」とも解釈可能である。

「ノミ」には典型的な語とりたてと見られる例や典型的な句とりたてと見られる例もあるが，語とりたてとも句とりたてとも解釈可能なもの，裏を返せば，語とりたてとも句とりたてとも截然と分けることができない例が存在する。このような例を句とりたてに引き寄せて解釈をすれば，「ノミ」のほとんどが句とりたてとして機能しているという分析もできてしまうのである。先行研究では，語とりたてと句とりたて，いずれの解釈も可能な場合に，なぜ句とりたてとして「ノミ」を捉えることができるのか，その具体的な説明に乏しいまま，格助詞との承接形式が第２形式であることから，「ノミ」を第２種副助詞として認定しているところに問題がある。

3.2.2　問題点その２――ガ格名詞句のとりたて――

「ノミ」の第１種副助詞（語とりたて）から第２種副助詞（句とりたて）への変容が，第１形式や第２形式などの表現形式と関係があるとすれば，古典語のいわゆるガ格名詞句に下接する「ノミ」は，どのようなとりたてとして判断されてきたのであろ

うか。古典語のガ格名詞句は格助詞「ガ」による表示は受けないため，第１形式と第２形式の区別はできない。つまり，ガ格名詞句に下接する「ノミ」の場合には，第１種副助詞なのか第２種副助詞なのか識別できないということになる。特に，第１種副助詞から第２種副助詞への過渡期と位置づけられている奈良期においては，語とりたてなのか句とりたてなのかは，文脈に委ねられることになる。

㉜　昼は咲き夜は恋ひ寝る合歓木の花君のみ見めや（君耳将見哉）戯奴（わけ）さへに見よ
（万葉集巻８・1461）

㉝　紫の名高の浦の真砂土袖のみ触れて（袖耳觸而）寝ずかなりなむ
（万葉集巻７・1392）

㉞　はしきやし我家の毛桃本茂く花のみ咲きて（花耳開而）ならずあらめやも
（万葉集巻７・1358）

㉜は，「君」と「戯奴」が対比されており，語とりたてと考えられる。㉝は，「袖」という語と対比されるものはなく，「袖が触れる」ばかりで「共寝しない」という句とりたてと考えられる。㉞は，「花」に対して「実」が想定されるので語とりたてと考えることもできるが，「花が咲く」ばかりで「実がならない」という句とりたてとも考えられるであろう。

奈良期の「ノミ」は第１形式であるにもかかわらず，このように語とりたて，句とりたて，あるいはいずれとも判断しがたいものなどが混在している状態である。平安期の「ノミ」が第２形式をとりながらも，語とりたてや句とりたて，あるいはいずれとも判断しがたいものなどを含むことと同様である(5)。このことは承接形式ととりたての仕方とは相関していないということの証左となろう。

3.3　語用論的とりたて

古典語のガ格名詞句は格助詞「ガ」による表示は受けないため，結局のところ「ノミ」の解釈は前後の文脈によって，語とりたてであるか句とりたてであるかを判断するしかない。言い換えれば，ヲ格名詞句やニ格名詞句の場合でも，「ノミヲ」「ノミニ」であろうが「ヲノミ」「ニノミ」であろうが，語とりたてなのか句とりたてなのかは，前後の文脈によって判断されていたという可能性が大きい。第１形式や第２形式などの表現形式に支えられて，「ノミ」がどのようなとりたてをしているのか判断するという必要性はないのである。

現代日本語に関してではあるが沼田（2008）は，「とりたての焦点は文脈等から解

釈される他者との相対的な関係，つまり語用論的要因で決定されると言える。」（23頁）とし，直前焦点，後方移動焦点，前方移動焦点の三種をあげる（㉟～㊲は沼田（2008）による）。

㉟　レース当日。〈天気が悪い〉だけで，車の調子は絶好調だ。（直前焦点）
㊱　〈金だけ受け取って〉〈仕事をし〉ない。＝〈金を受け取った〉だけで〈仕事をし〉ない。（後方移動焦点）
㊲　〈粉薬〉を飲むだけで〈水〉を飲まなければむせてしまう。＝〈粉薬〉だけを飲んで〈水〉を飲まなければむせてしまう。（前方移動焦点）

先に見たように，奈良期平安期いずれにおいても，結局のところ文脈によって，語とりたてや句とりたてが決定していた。古代語においても，どの部分をとりたてるのかは語用論的要因に大きく左右されるものと思われ，承接形式との関係性はないと考えられる。

4．第1形式から第2形式への変化の位置づけ

3節において見た問題点がある以上，「ノミ」における承接形式の変化を，語とりたての第1種副助詞から句とりたての第2種副助詞への変容の表れであるとは捉えられない。では，「ノミ」における承接形式の変化はどのような現象として位置づけられるであろうか。本稿では先行研究に対する代案として，「ノミ」の名詞性の後退，副助詞への転成という文法化現象として捉えてみたい。

副助詞の成立過程に関しては，早く此島（1966）に指摘がある。

> 「くらい」の右のような用法（山田注　少佐にぐらゐなれるだらう。）はまだ普通でないけれども，将来成立する可能性はあり，副助詞の成立過程を示唆している。すなわち，本来は「少佐ぐらい」のように他の名詞と複合して接尾辞的に用いられたのが，しだいに上の名詞に主観的意義を添えて下の叙述に続ける助詞性を獲得し，ついには格助詞の下に降りて完全に助詞化するわけで，おそらく副助詞の多くがこのような発達過程をたどったものかと思われる。　（231頁）

「ノミ」の語源は明らかではないが，「之身」かと言われている。第1形式は格助詞が「ノミ」に後接することから「ノミ」に名詞性が残されていると考えられる。奈良期の「ノミ」には第2形式が見られず第1形式であるということは，「ノミ」とい

う語がまだ名詞的性格を持っていることの表れと考えることができるであろう。構文的な性質として名詞的性格を残していながらも，用法としては「限定」という副助詞的性格を持っているのである。ただし,「之身」という漢字列は万葉集には見られず,「ノミ」が名詞性を持ちつつも「限定」という機能を備え始めたという文法化の後付はできない。

そこでここでは江口（2007）の理論を援用して考えてみたい。江口（2007）では,「バカリ」の限定用法が中古から見られるという小柳（2003）の指摘,「バカリ」が格助詞に後接できるようになるのは中世末期であるという宮地（2003）の指摘を踏まえ,「バカリ」の歴史的な変容について次のように述べる。

> 「ばかり」が格助詞に後接できるようになるのは限定の用法があらわれてからさらに時間がかかっている。つまり限定方法が使えるようになったからといってすぐに取り立て詞（山田注　本稿で言う副助詞）になるわけではない。　（39頁）

また,「ダケ」に関しても同様に,「格助詞に後接できるようになるのは,「限定」の用法が定着してからである」(40頁）と述べている。

平安期に「ノミ」と格助詞との承接が第２形式となるのは，奈良期で「限定」用法を持っていた「ノミ」が，この時代にはじめて名詞性を捨て副助詞化したことを示しているものと考えることが可能であろう。すなわち，内容語から機能語へと変化する文法化（脱語彙化）を果たしたと見なせるわけである。

５．第１形式復活の位置づけ

副助詞化した「ノミ」と格助詞との承接は，平安期において第２形式で落ち着いていたが，鎌倉期以降再び第１形式が見られるようになり明治期には第２形式を凌駕する。これはどのような言語現象として位置づけられるであろうか。

現代日本語においては,「コソ」「ダケ」「バカリ」「ナド」「ナンカ」などの副助詞は格助詞の前後いずれにも承接することができる。

あなた（だけに／にだけ）話す。
うちの子はいつもあの子（ばかりと／とばかり）遊んでいる。
自然がないところ（などへ／へなど）行きたくない。
この薬（のみで／でのみ）治る。
学歴（なんかで／でなんか）人を判断できない。

副助詞としての成立事情はそれぞれ異なるであろうが，一旦副助詞としてとりたて機能が確定した語を運用する上では，格助詞に後接する第2形式を用いなければならないという制限があるよりも，格助詞に前接しようが後接しようが，とりたて機能を発揮することができるという方が言語運用上は利便性が高い。ある種の副助詞において第1形式と第2形式の並存が見られるのは，これらの語を使い勝手のよい状況で使用したいという言語使用者の意識の表れと考えられる。

鎌倉期以降の「ノミ」に第1形式が新たに見られるようになってきたのは，上記で見たように言語使用者が言語運用上の利便性を求めたからであると考えることができるであろう。2．4節で見たように，明治期における「ノミ」は，第1形式，第2形式いずれの承接形式にしてもその機能に変わりはなく，両形式が混用されていた。このことは，「ノミ」の使用において，格助詞の前後どちらにも置くことができるという言語運用上の利便性を言語使用者が長い間追求した結果なのである(6)。

6．おわりに

本稿では，歴史上2回見られた「ノミ」と格助詞との承接形式の変化に関する位置づけを試みた。奈良期から平安期にかけての第1形式から第2形式への変化に関しては，「ノミ」の名詞性の後退及び副助詞化という文法化現象と位置づけた。鎌倉期以降の第1形式の漸増に関しては，言語使用者が副助詞として定着した「ノミ」を使用する上で利便性を求めた結果であると位置づけた。ただし，第1形式から第2形式の変化を文法化として位置づけたことに関しては，「ノミ」自体の用例から帰納したわけではなく，他の副助詞の変容と同様の変化があったと仮定した上での位置づけであり，この点は今後の課題となる。

また本稿では，第1種副助詞（語とりたて），第2種副助詞（句とりたて）という枠組みと格助詞との承接形式とを関連づける先行研究の問題点も合わせて指摘した。格助詞に後接可能な副助詞（「だけ」「ばかり」「など」「なんか」「くらい」「まで」「さえ」「こそ」等）が，格助詞「ガ」に対しては常に前接するのはなぜかという問題とともに，再考を要するであろう。

個々の副助詞に関する通時的研究はまだ手が付けられていないものが多い。体系的な研究の発展のためにも今後さらなる研究が待たれる。

【注】

（1）副助詞には大きく分けて，取り立て用法と程度用法があり，名詞，副詞成分（「かく」，時数名詞，数量詞等），連用修飾語（形容詞連用形，テ形，「ず」等）などに下接する。本

稿では議論をわかりやすくするため，格成分（補足語成分）に下接する例を扱う。

（２）また築島裕編『訓點語彙集成』（汲古書院）によれば，平安期における訓点資料では第２形式が50例程度見られる中で，第１形式は15例見られる。なぜ訓点資料に第１形式が多く見られるのかに関しては，今後の課題としたい。

（３）『太陽コーパス』のうち明治時代にあたる1895年，1901年，1909年について調査した。

（４）近藤（1995），宮地（2007）においても同様の考えが示されている。

（５）この点に関して，小柳（1999）では以下のようにまとめている。

> 「名詞＋ノミ〔格助詞非表出〕」のノミは形式上は第１種であるか第２種であるか不明である。第１種もわずかにあると思われるが，多くは第２種であろう。

その根拠として，「音のみを泣く」「言のみを言ふ」「花のみに咲く」などの例をあげ，「音」と「泣く」，「言」と「言ふ」，「花」と「咲く」などが「一対一対応的に緊密な組み合わせである」，すなわち「句全体に関係せざるをえないと思われ」，そのような例が多く見られることをあげる。しかし，㉝や㉞などの例はその他にも見られ，その存在を捨象してまで「名詞＋ノミ〔格助詞非表出〕」における「ノミ」を「多くは第２種であろう」と位置づけを行うのは強引であろう。

この強引な位置づけによって，第１形式であるにもかかわらず，内実は第２種副助詞であるという矛盾を生み，その矛盾を解消するために，奈良期を第１種副助詞から第２種副助詞への変容過渡期であると帰結するに至るわけである。しかし，「ノミ」の承接形式が奈良期第１形式にせよ平安期第２形式にせよ，語とりたてと句とりたてが混在している状況が認められる以上，奈良期を第１種副助詞から第２種副助詞への変容過渡期であるとする考え方は否定される。

（６）副助詞が格助詞との承接において前後接可能になるという言語運用上の利便性に関しては，「コソ」においても同様の振る舞いを見せる。山田（2003）を参照されたい。

【参考文献】

江口　正（2007）「形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ数量詞遊離構文との関連から」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

此島正年（1966）『国語助詞の研究――助詞史の素描――』桜楓社

小柳智一（1997）「中古の「バカリ」と「ノミ」」『國學院雑誌』98－12

小柳智一（1998）「中古の「ノミ」について――存在単質性の副助詞――」『國學院雑誌』99－7

小柳智一（1999）「万葉集のノミ――史的変容――」『実践国文学』55

小柳智一（2003）「限定のとりたての歴史的変化――中古以前――」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて――現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版

近藤泰弘（1995）「中古語の副助詞の階層性について――現代語と比較して――」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

沼田善子（2008）「とりたて詞の分布と意味をめぐって――「も」と「だけ」の記述を例に――」『日本語文法』８－２
宮地朝子（1999）「「とりたて」形式の構文的特徴と意味機能――とりたて詞と係助詞・副助詞――」『日本語論究』６和泉書院
宮地朝子（2003）「限定のとりたての歴史的変化――中世以降――」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて――現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版
宮地朝子（2007）『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究――文法史構築の一試論』（ひつじ書房）
山田昌裕（2003）「表現形式「ガコソ」発生のメカニズムと許容度――web 上の日本語を中心に――」『相模女子大学紀要（人文・社会系）』66A

【資料一覧】

本稿で扱う例は，国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースの中から散文資料を中心とした。引用に際しては資料名と頁数を示した。また私に表記を改めたところがある。

【奈良期】

『万葉集』（引用例は巻数と歌番号で示す。）

【平安期】

『竹取物語』『落窪物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『狭衣物語』『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『今昔物語』『栄花物語』『大鏡』『枕草子』『性霊集』（以上，日本古典文学データベース）

『最明寺本往生要集　譯文篇』汲古書院

『中山法華経寺蔵三教指帰注総索引及び研究』武蔵野書院

【鎌倉期室町期】

『愚管抄』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『沙石集』『保元物語』『平治物語』『平家物語』『方丈記』『無名抄』『正法眼蔵』『梁塵秘抄』『増鏡』『徒然草』『曽我物語』『御伽草子（28作品）』『謡曲集（102作品）』

【江戸期】

仮名草子集『伊曽保物語』『犬枕』『恨の介』『仁勢物語』『竹斎』『夫婦宗論物語』『浮世物語』

江戸笑話集『きのふはけふの物語』『口軽御前男』『口軽露がはなし』『鹿の巻筆』『鹿の子餅』『鯛の味噌津』『聞上手』『無事志有意』

浮世草子集『傾城禁短気』『好色萬金丹』『新色五巻書』

俳論集『去来抄』『三冊子』

浄瑠璃集『ひらがな盛衰記』『仮名手本忠臣蔵』『伽羅先代萩』『夏祭浪花鑑』『鎌倉三代記』『源平布引瀧』『新版歌祭文』『八百屋お七』『頼光跡目論』

近世随想集『ひとりね』『孔雀楼筆記』『山中人饒舌』『塊記』

近世思想家文集『翁の文』『玉くしげ』『自然真営道』『都鄙問答』『統道真伝』『童子問』

近世文学論集『歌意考』『歌学提要』『源氏物語玉の小櫛』『国家八論』『作詩志彀』『詩学逢原』

『淡窓詩話』『徂徠先生問答書』
芭蕉文集『おくのほそ道』『笈の小文』『更級紀行』『嵯峨日記』『鹿島紀行』『書簡』『俳文』『評語』『野ざらし紀行』
一茶集『おらが春』『父の終焉日記』『文集』
西鶴集『好色一代女』『好色一代男』『好色五人女』『世間胸算用』『日本永代蔵』
近松浄瑠璃集『けいせい反魂香』『五十年忌歌念佛』『山崎與次兵衛壽の門松』『重井筒』『出世景清』『女殺油地獄』『心中宵庚申』『心中天の網島』『曾根崎心中』『鑓の權三重帷子』『大經師昔暦』『丹波與作待夜の小室節』『博多小女郎波枕』『平家女護嶋』『堀川波鼓』『冥途の飛脚』『夕霧阿波鳴渡』『用明天王職人鑑』『國性爺合戰』『嫗山姥』
上田秋成集『雨月物語』『春雨物語』『膽大小心録』
黄表紙本『金々先生栄花夢』『御手料理御知而巳大悲千禄本』『孔子縞干時藍染』『江戸生艶気樺焼』『高漫斉行脚日記』『手前勝手御存商売物』『巡廻能名題家莫切自根金生木』『大極上請合売心学早染艸』『敵討義女英』『文武二道万石通』『榮花程五十年蕎麦価五十銭見徳一炊夢』
洒落本『辰巳之園』『卯地臭意』『傾城買四十八手』『軽井茶話道中粹語録』『傾城買二筋道』『青楼昼之世界錦之裏』『通言総籬』『遊子方言』
滑稽本『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』
人情本『春色辰巳園』『春色梅兒譽美』
その他『折たく柴の記』『蘭学事始』『椿説弓張月』『狂言集（110作品）』
【明治期】
雑誌『太陽』（国立国語研究所資料集15『太陽コーパス』（博文館新社））